

作業経過検討用

ケースの疾患名	年齢	性別	問題の焦点（検討の焦点）	
脳幹梗塞	80代	女性	信念対立や作業機能障害等複数の問題が発生している中でどの問題からどのように介入していくか	
リハへのニーズ	介入背景となる根拠		臨床思考結果	即興性
物語的R	科学的R		提供している作業	相互交流的R
本人や家族は何を希望しているか	どのような方針が示されているか		実際のプログラム	介入時に気づいた点や変更点についての考察、経過の考察 変更した（または変更する）作業の説明、介入時の即興的な合意形成など
クライアント本人 習い事をたくさんしていた。編み物や裁縫が得意。友人を自宅に招いておしゃべりをするのが好きだった。 脳幹梗塞を発症し入院。「箸を使うとき等、右手が使いにくくて困る。それ以外はやりたいことか思いつきません」消極的な発言が多く、1日の大半をベッド上で過ごす。1ヶ月半後「退屈、早く家に帰りたい」と涙を流される場面が増える。	面接評価（ADOC、CAOD） ①編み物 ②入浴 ③お墓参り ④草むしり CAOD46点（作業剥奪、作業阻害が高値） 「部屋にいてもすることがなくて退屈です」 「リハビリ以外の時間は寝ていますよ」 「何かやろうとすると危ないからと止められる」 「編み物は手が動きにくいからできるか分からないけどやってみたい」	⇒	「できるか分からないけど」という不安に対して、まずは基本的な編み方から確認し、その後簡単な作品から作ってみることを提案した	「箸を使うとき等、右手が使いにくい」「それ以外は（困っていることとか）思いつきません」という言葉から、まずは上肢機能訓練中心に作業療法を開始した。1ヶ月半後上肢機能は向上したが「退屈」「早く家に帰りたい」と涙を流されることが増え、作業機能障害を疑い再度面接評価を実施した。 やりたいこととして編み物が挙がり、作業療法プログラムに追加した。「やっていて楽しいです」と前向きな発言が聞かれたが、リハビリ以外の時間は寝て過ごすことが多かった。
家族 入院前から自宅内での転倒が増えたことを心配されている。「もう少しよくなってから自宅に帰ってきてほしいです」	 入院により作業剥奪、作業疎外を中心とした作業機能障害の可能性あり。それにより健康状態の悪化、幸福感の低下を体験している。	⇒	1日20分程度編み物を担当OTと実施 「手が思うように動かないけどやっていて楽しいです」 →CAOD50点 リハビリ以外の時間の過ごし方は変わらず	【検討事項】 ・本人とご家族の信念対立（帰りたいvs良くなってから） ・作業機能障害 作業はく奪：危ないから動かないで！ 作業阻害：不安で思いつきません 作業不均衡：多くの時間を寝て過ごす 作業周縁化：もう少し良くなるまで帰ってこないで など複数の問題が同時に発生している状況。これらについてまずどの問題からどのように介入していくのか。